

抑留記

福井県 矢部 矩 喬

初めに、抑留者報告書を拝読致し、大変なご苦勞をなさった皆様方ばかりで、心から敬服し、厚くお礼申し上げます。

私の場合は、七年間もの長い間続いた戦争があと半年で終戦という時からの短い服役であったこと、また、任地が朝鮮であったので灯火管制も無く、落ち着いた所でした。

任地へ

昭和二十(一九四五年)の二月初旬は雪深く、半日ほど家に立ち寄り、夜中起きて雪の一本道を武生駅へ。二歳下の弟(教員)に荷物を背負ってもらう。六歳下の弟は志願し予科練へ入隊中。京都駅で空襲警報中を軍人だけで下関まで。

朝鮮京城(ソウル)監督班で約二週間の教育後、平壤へ転勤。平壤は現在のピョンヤンです。平壤

会社にもあふれていた。

抑留記

敗戦の年、昭和二十年九月下旬だったと思う。

山の中の弥勒堂の老朽兵舎に強制収容されていた我々、平壤地区の部隊にも移動命令がきた。この兵舎に集結させられた時は、身の回り品をいっばい詰め込んだ行李を背負っての強行軍で随分苦しい思いをしたものだが、今度は待ちに待った内地帰還だと心は早くも懐かしの我が家に走っていた。マンドリンのような自動小銃をかついだソ連兵達に監視されて平壤駅に着いた。駅の構内には満州からの引揚家族列車が何本も立ち往生していたが、ほとんどが老人、女、子供ばかりで、幾日も食事らしい物ももらえず、毎日のように病人が死んでゆくとかという話を聞いた。かつての駅長や助役、駅の職員も今はその地位を追われ、毎日駅の掃除などの雑役をしているとか、我々と出会っても言葉を交わす気力さえも失ってしまっていた。

飢えて青白い顔をした子供達が、食べ物をねだ

郊外の美林という広野に三井鉱山朝鮮飛行機製作所があり、平壤在勤所もありました。製作所では二枚羽根の練習機、キの八六「赤トンボ」を製作していました。従業員は五十人もいたであろうか。

ところが、エンジンやプロペラや部品なども日本の内地から送ってくるようになっていたが、日々敗戦の色濃くほとんど届かず、作業は全く進まなかった。我々にも策なく、従業員達にも気の毒でした。在勤所は中島大尉が長で、将校七人、軍属や事務員など合計十五人ほどの小部隊でした。平壤には本国からの予備役の部隊がいくつか駐屯していて、その中に福井県の部隊もある事を聞いた。

この人は同じ村の岩野市兵衛さんと言う人で、復員後、書画用の越前和紙製造で人間国宝に選ばれました。現在の市兵衛さんも二代目人間国宝として選ばれました。日ソ中立条約を無視してのソビエト軍の侵攻以来、宿舎から外へ出歩く事もできず困っていました。

満州方面からの引揚者は老人や婦女子ばかりで、
ってホームを渡り歩いていたが、なに一つもらえ
るはずもなかった。
貨物廠には倉庫に入りきらない食糧の缶詰が山
のように何カ所にも野積みになってあったのが、こ
のようにすべてが逆転してしまったのもみんな小
生達軍人の責任のように思えて、敗戦の惨めさを
しみじみと覚えるのでした。

混乱したこの町に妻や子供を残したままの者も
沢山いたが、監視が厳しいため伝言一つできない
でいた。

三井朝鮮飛行機の人々や会社の社宅に引揚げて
来ていた満州からの女、子供達、可愛い軍属達は
どうしているだろうか。二度と訪れることはでき
ないであろう平壤の町よサヨナラ。夜通し北へ
北へと走った真暗な貨車の中で重なり合ってまど
ろみながら、またしても故郷の夢を見るのでした。

我々を乗せた貨物船は清津の港を離れた。ここ
ろが不思議なことに、船はさらに北に向かって走
っているようであった。何回となく船底から甲板

に出て、空と海とを眺めながら、樺太へ上陸するのだろう、などと言いつつ、お互いに強気で話し合っていたが、だんだんと不安な気持ちに変わっていった。

ダモイ「帰還」の夢は見事に破れ意気消沈してポセツト湾に上陸した。見渡す限り岩と砂浜で葦の茂った荒野である。

十月の終わりともなれば、シベリアから日本海に向けて吹く風はカラカラに乾ききった砂混じりの冷たい風で、それこそ骨までこたえる。みんな弥勒堂で作った手縫いのリュックに革脚絆、長靴、携帯燃料、水筒、飯盒、シャツ、軍足など全財産を詰め込んで、もう用を成さ無くなった重い軍刀も、戦い破れてからも武士の面目だけは保たねばと後生大事にぶら下げて、砂丘の道を延々と歩く。もう誰一人、口を開く者はなかった。

涙や鼻水が止めどなく頬を伝う。強く生き抜くことを心に誓いながら足だけをひきずっていた。

樹木の全然ない丘陵地の草原で幕舎生活が始ま

った。

円形の大きなテントに三十人ずつ入っていたが、来る日も来る日も何するでもなくゴロゴロと寝たままの毎日であった。食事の量が非常に少なく、明けても暮れても食べ物の話ばかりしていた。よくも話の種が付きなかつたものだと思う。

「清水港の名物は、お茶の香りと男伊達……」「大黄河」の歌を覚えたのもこの時でした。

無造作に掘られた溝を跨いで、青空を仰ぎ前の人の後ろ姿を拝みながら排泄作業を営むことに馴れたのもこの時からですが、まだ若かった「二十四歳」の小生にはいささか恥ずかしかった。すべてが敗戦のお陰と勇気を振るつた次第である。

ポセツトでの生活は十日ほど続いたと思うが、途中で一回だけ、バラック建てのシャワーを浴びさせてくれた。

弥勒堂でも柵に近づいて射殺された者があつたとか、ここでも幕舎から離れすぎて射殺されたらしい。ソ連兵にとっては捕虜の一人や二人はどう

なつてもよいのであるが、ただ脱走されることを特に警戒していた。ここまで来てからでも、まだ

ダモイできるかも知れないとかすかな望みを持ち続けていたが、その後ヤポンスキーを乗せた貨車は西へ西へとシベリアの荒原を走り続けて、いよいよダモイは絶望的となったのである。

シベリアの鉄道は御存じのごとく広軌で、貨車の幅も広く高さも高い。貨車の入り口を境にして前後に分け、さらに上下二段に仕切っており、各仕切りに両側から互い違いに寝るのである。

貨車の中央には急造の便所とストープが設けてあるが、車内は非常に暗い。走り出すと一昼夜ぐらいは走り通しであり、停車すると四、五時間以上で相当長いが、いつ発車するやら全く予想できないありさまであった。食事は最後尾の炊事車から樽で当番がもらい受けてくるが、これがまた不定期で量も非常に少ない。

湯茶の配給はないので、汽車が停まると仲間の水筒を持って停車中の何本もの列車の下をくぐり

抜けて走っていくのである。

またある者は停車中の石炭を積んだ車から燃料を仕入れてくる者もいた。またしても生理現象の話で誠に恐縮ですが、ほとんどの者がこの時すますのです。線路沿いにズラリと並んだ様は全く壮观と言おうか捕虜ならではの珍光景である。先の列車のものはすでに凍って石コロのように固い。とにかく広いには全く驚く。見渡す限りの黄色い平野が続いた。不毛の地もある。バイカル湖南を走るにも一昼夜はかかったと思う。

約一カ月近くもかかってウルル山脈の向こうのカザンの町に着いたのである。ここからは、今までは毎日列車の中で寝てばかりいた者達が今度は行軍である。ポセツト湾の行軍も寒かったが、今度は雪さえ積もっている。湿気の少ない軽い粉雪で量は三、四十センチほどだった。後で知つたのだが、行程も八十キロの強行軍であつた由。毎日の食事は高粱や燕麦やえんどうによく似た豆とか、黒パンを普通の食事の三分の一ぐらいの量しかも

らえなかったので体力は衰弱していた。

夜は零下一〇度以下にもなった。とにかく前の者に続いて夢中で歩くだけである。寒さと空腹と眠気が襲って来る。今ここで倒れたならすべてが終わりである。父や母、弟妹達の顔が浮んでは消えた。眠りながら足だけが動いていた。ここまで担いできたリュックの荷物も半分以上、雪の中に捨ててしまった。隊列は遅々として進まなかった。力尽きて倒れる者も出始めた。時折ソ連兵のブツ放す銃声に驚いてまた歩き出すのでした。老人や凍傷患者の落伍者は馬糧で運ばれていった。途中、倉庫か百姓小屋のようなところで、飯盒の蓋に一杯ずつ牛乳入りの麦粥をもらった時は実に嬉しかった。

このようにして翌日の午後、目的地エラブカの町に着くことができたのである。タタール共和国内にあるこの町にはA、B二つの収容所があつて、各収容所には約一万入所できるとか、小生はBラーゲルに収容された。これから二年余の抑

外に運ぶのである。読物としては分の厚い共産党史とアカハタ新聞だけである。碁石や麻雀、パイも白樺の木で造つて、命の綱である黒パンをかけて勝負事に熱中する者もあり、朝から晩まで二段ベッドの上で食べ物の話に余念のない連中も多い。コックリさんのお告げだと言つてデマを言いふらす者や手相骨相を見て回る者もいた。男ばかりの生活で、女性としては毎日一回炊事場に検査に来る看護婦のレナート、月に二、三回訪れる日本部長のクロイツル女史の二人だけであつたが、腹いっばい食べられないので世間一般の雑な話はあまり出なかつたようである。

鋳継ぎの当てられたホロー引きの食器にスープや粥状のカーシャが配られるのであるが、同じテーブルに並んだ他人の皿の量と比較しながら、できるだけ長い時間をかけて人よりは遅くすます努力をしたものです。食事をしてる時だけが楽しいので、終わった途端に食欲と飢えがやってくるからである。

留生活が始まるのである。収容所は周囲が高い煉瓦の塀で囲まれ、四隅に見張りの高い望楼が立っていた。敷地内に煉瓦造り三階建の建物を中心にして数棟と、草葺の屋根だけを地上に出した洞窟兵舎二棟から成つていた。散髪屋、洗濯工場、食堂炊事、医務所、縫製工場、靴工場まであつて、特技のある人は専従でその仕事をしていた。その他一般はラポーターといつて使役を割り当てられるのである。所内で使用する水を町の給水所から運んで来る者、原木を夏ならば鉄輪の車で、冬は櫓で運ぶ者、この様子が大変面白い。一台に十人ほどずつ引縄を肩に掛けて掛け声をそろえてヨイサホイサと引くのであるが、少しでも他人より力を出して張り切つたら身体が持たないので、適当に縄に連なっているだけで全部ダブダブにたるんでいる。それでも少しずつ進むものです。

特別清掃班は少し食事の配給量が多いので進んで志願する者もいたが、冬などはカチカチに凍つた汚物を長い棒の先につけた鉄のみで砕いて所
冬は二重硝子の小窓にも部屋の蒸気が一面に氷になつて相当室内の温度も下がるためか、一晩に五回も六回も小便に行かなければならない。老人達は途中で漏れてしまうので監視の歩哨を立てたりした。便所は蒸気が全部天井で凍るので、二メートルほどの大きなツララが一面にたれ下がっていた。

小生は一年半ほど炊事勤務を命ぜられた。勤務は火夫、調理、清掃、洗浄などに分かれていたが、私は洗浄班で食器洗ばかりしていた。百枚ほどの皿を何回も繰り返すため、初めは新しかった湯も後にはどろどろに濁つてあまり清潔なものではなかつたが、三、四人で洗うのでなかなか忙しい思いをしたものです。仕事を終わって夜引き揚げる時、オーロラ「極光」を拝したことも二、三回ありました。「北極点に集まった大積乱雲、その尾根の冠雪が黄金色に輝くように」四季の移り変わりは日本と同じで、夏はシャツ一枚でも大変暑い日もあつたし、雷が鳴つたり、木枯らしが吹

いて白樺の木の葉を吹き散らしたり、馬鈴薯がとれることも日本と同じであったが、春や秋の期間が大変短かった。また位置が北極に近いため夏は夜遅くまで薄明るい白夜の日が続きました。

ロシアの山林は、どの山も平地が多くて広い。大きなエゾ松は、高さが四十メートルにもなる由。私も、山の中にある洞窟兵舎に一月ほど宿泊して、大きな松の木をカマ川の岸まで運ぶ作業もした。

春は雪どけ水をいっぱいたたえて流れる湖のような河も谷も一面に凍って、その上を原木を運んで通ったこともあった。

窓の少ない丸太の枠組の家。背の低い有色で蒙古人のようなタタール原住民のことなど次々と思いで出されて来るのですが「雪の降る町を思い出だけけが通り過ぎて行く、雪の降る町を……」の歌のごとく、今は遠い昔の思い出となってしまった。

以上断片的に書き並べましたが、昭和二十二年十一月、無事函館港に上陸することができました。

二年半の抑留生活は実に長いものでしたが、ただ何とかして生き抜きたいという一心で、十日間ほど発熱で病んだ以外は病氣らしい病氣もせず、全く気力で生き抜いて来たのです。今でもあの時のことを思えば、人間は相当な苦しみにも耐えられるという事を体験したし、自信もできた。

ところで、平成十七年は終戦後六十年の節目の年に当たる、月日の経過の速い事には驚嘆致しております。私もだんだんと医者通いが多くなってきましたが頑張ります。

皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

短歌

シベリヤの 捕虜の幕舎に 習いたる

空腹の 歌を聞きいき 顔剃られつつ

ラゲルの 癒ゆるすべなき 捕虜の日々

シベリヤの 故郷の食を せめて語りき

ラゲルの 白夜は更けて オーロラの

シベリヤの 積乱雲に 耀うを見き

シベリヤの 洞窟兵舎に 仰ぎたる

月思いをり 今日十五夜

香にけむる 遺影を拝す ラーゲルにて

福井訛を 使いし君よ

勤

昭和二十年八月十五日 終戦

昭和二十年八月下旬 弥勒堂の旧兵舎に収容

容

昭和二十年九月下旬 平壤駅―清津―ポセ

昭和二十年十月下旬 ツト湾に上陸

昭和二十年十月下旬 シベリア鉄道―カザ

ン駅下車

二カ年間 エラブカの収容所に抑留

抑留

昭和二十二年十一月十二日 函館港上陸 復員

(福井県 佐々木 清左夫)

【執筆者の紹介】

大正十一年十月二十日 福井県に生まれる

昭和十五年三月 福井県立武生中学校卒業

昭和十五年三月 福井高等工業学校電気科履

昭和十七年一月 同校 退職

昭和十七年四月 同高電気工学科に入

昭和十九年九月 同校 卒業

昭和十九年十月十日 岐阜陸軍航空整備学

昭和二十年二月十日 校に入

昭和二十年三月一日 同校卒業、陸軍航空

本部京城監督班勤務

朝鮮平壤在勤所に転